

# AAR News



## 特集

# 熊本地震緊急支援 支援の隙間を埋めに行く

「被災地障害者センター」の設立に携わった、くまもと障害者労働者センター代表の倉田哲也さん（右）とAAR生田目充＝熊本県八代市で2026年8月17日

## AARニュース2026秋号

p1-4 特集：熊本地震緊急支援

p5 地震被災地での障がい者支援～フィリピン地震「対話を重ね、届ける支援」

p6 活動レポート：能登半島大雨緊急支援 カンボジア国内避難民支援

p7 活動レポート：コンゴ民主共和国 感染症対策 スタッフ日記：ミャンマー

p8-9 インタビュー：加藤 タキさん

p10-11 インフォメーション

p12 スタッフ紹介：柳町 幸平（支援事業部／能登事務所）



### 特別インタビュー 加藤 タキさん

（アーティスト・コーディネーター／AAR副会長）

「年齢は関係ない  
『したいこと』に挑戦し続ける」  
→ p 8-9



**AAR Japan**

認定NPO法人 難民を助ける会



支援事業部／能登事務所

**柳町 幸平** YANAGIMACHI Kohei

## our staff | スタッフ紹介

## 支援が届く人と届かない人の 差を埋めるのが、私たちの役割

能登事務所に常駐して現地での活動を担う柳町さん。  
障がい者支援に携わるきっかけや能登での活動について  
話を聞きました。

### —障がい者支援に携わるようになったきっかけは？

学生の頃から、困っている人の役に立ちたいという想いがありました。その中で障がい者と関わることを選んだのは、自分の内面への問題意識があります。人は平等だと頭では理解していても、障がいのある人をどこかで区別して見てしまう。特に、重度の障がいがある方と同じ目線に立つことの難しさを感じていました。実際に関わっていくことで、自分の捉え方や世間の見え方が変わっていくのではないかと思います。大学卒業後にボランティアに参加しました。その後、専門学校で社会福祉の資格を取り、障がい福祉事業所で20年近く働きました。

### —AARに入ったきっかけは？

障がい者の中でも、災害によってより厳しい環境に置かれている方への支援の重要性を感じていました。能登に最初に入ったのは、JDF（日本障害フォーラム）の派遣枠で、2024年5月の1週間でした。AARを知ったのは、その時に協働したからです。意思決定の速さと、混乱した状況でも障がい者への支援をきちんとやっていることに驚きました。障がい者支援と災害支援の両方をやっている団体はほとんどなく、長期的に能登の復興に携わりたいと思っていたので、AARに加わりました。

### —能登ではどんな活動をしていますか？

能登事務所に常駐しているのは私だけなので、障がいのある方の病院への送迎から事務作業まで何でもやっています。8月末の大雨被害の際は、被災した福祉施設を

訪問し、泥かきなどの復旧作業から支援内容の調整まで対応しました。AARに相談するという選択肢を障がい者施設に提案できる意義は大きいと思います。

行政による支援の申請は本人から動くことが前提ですが、障がいや被災の状況によってはそれができない方もいます。そのために注力しているのがニーズの掘り起こしです。声を上げにくい方のもとへ、こちらから訪ねて話を聞きます。声を上げられる方には支援が届き、上げられない方には届かない。その差を埋めることが私たちの役割です。



視覚障がいのある男性をショートステイへ送迎する柳町

ビルド・バック・ベター（より良い復興）として取り組んでいるのが、災害時に要配慮者が安心して避難できる体制をあらかじめ地域に整える、防災プラットフォームの整備です。よく言われることですが、障がい者が暮らしやすい社会は、すべての人が暮らしやすい社会でもあります。地域の皆さんとともに、災害に強い地域づくりを進めていきたいと思っています。

編集部より

今年の夏は、各地で大雨被害が発生しました。そのせいか熊本地震発生の7月28日がずいぶん前に感じられます。実際にはまだ2カ月ほどで、被災者の方の生活再建はこれからが本番です。新たな大規模災害が起こらないよう、秋空を見上げて祈っています。

# AAR News

2026 Autumn No.496

次号は2027年1月上旬にお届け予定です。

特定非営利活動法人 難民を助ける会

〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-12-2 ミズホビル7F

Tel.03-5423-4511 Fax.03-5423-4450

<https://aarjapan.gr.jp/>



**AAR Japan**

## 主な支援の流れと実績

● 7月28日  
午後4時27分、熊本県熊本地方を震源とするマグニチュード7.1の地震発生

● 7月29日  
職員が現地入り。八代市の障がい者支援施設「八代学園」に、水、給水用タンク、体拭きシートなどを届ける。8月末までに、避難所のほか11の福祉施設に物資を提供



● 7月30日  
炊き出し開始。宇城市では、東本願寺ボランティアチームと、八代市ではNPO法人ピースプロジェクトとの協働で実施。9月7日までに、計7,087食を提供



● 8月1日  
宇城市の「豊野町コミュニティセンター」に仮設シャワーを設置。8月末までに5カ所



● 8月8日  
八代市と氷川町に、外国人向け物資配付拠点を開設。9月7日までに、のべ317人に食料や衛生用品を提供



● 8月17日  
被災地障害者センター開設

りがたい」という人も。延福寺では、在宅避難や車中泊をしている住民が次々と集まり、400食を提供しました。その後、よりニーズのある場所に都度移動しながら、9月初旬までに、のべ7087食を提供できました。

また、発災から1週間程度、停電で一部の行政のPCが使用できなかったことや、道路の損壊などから、救援物資が十分届かない避難所や地域があり、AARが29日から開始した水や食料、衛生用品などの物資配付は大変喜ばれました。

### 猛暑をしのぐ 仮設シャワー

発災から3日ともなると、猛暑に加え、家の片付けなどに忙しい住民の方々の疲労の色が濃くなってきました。AAR

### 「やさしい日本語」 で外国人支援

日本語が不自由だったり、地域とのつながりが薄かったりする外国人も支援しています。被害が大きかった八代市、

Rは、建設・技術系ボランティア「風組関東」(小林直樹代表/東京と協働し、仮設のシャワールームを宇城市の「豊野町コミュニティセンター」に設置しました。東日本大震災の際に利用されたものと同じタイプで、給水車からの水を専用タンクに貯めて使います。「ぜひうちの地域にも」との声が相次ぎ、これまでに5カ所に設置しました。断水は解消しても、家の排水管や風呂が壊れて使えない、井戸水が濁って使えないなどのニーズが多数ありました。



即席めんやレトルト食品などを受け取るフィリピン出身の女性たち=八代市で2026年8月17日

宇城市、氷川町には、農業に従事するインドネシア、ベトナム、フィリピンなどアジア出身の方を中心に計5000人以上の外国人がいます。避難所や給水車についてまったく知らない人、知っていても

言葉の問題などで利用しにくく、自力でしのいでいる人が多数いました。

AARは八代市と氷川町の2カ所に、飲料水のほかハラル食品、アジア系調味料や缶詰、簡易トイレ、衛生用品などを用意した外国人向けの物資配付拠点を設置。「やさしい日本語」を使って、SNSなどで情報を拡散しました。物資は地元の方々にも提供し、その結果「あの農場に20人ぐらい外国人がいて、困っているみたい」「水がなく、行水でしのいでいるので助けてあげて」など情報が寄せられました。地震の影響で仕事ができず、不安に思う方がいる一方、家族に心配されて帰国する人や来日を取りやめる人も。外国人を支えることは、地域を支えることにもつながっていると改めて認識しました。

地震によって倒壊した家屋＝熊本県内で2026年7月30日



## 特集 令和8年熊本地震 緊急支援

# 支援の隙間を埋めに行く

2026年7月28日午後4時27分、熊本県熊本地方を震源とするマグニチュード7.1の大地震が発生しました。この地震により、宇城市と氷川町で震度7、八代市、宇土市、熊本市などで震度6強を記録し、死者38人、建物被害5万5717棟の大きな被害が発生しました。断水や停電が続く中、被災地は連日最高気温が35度を超える過酷な暑さにも見舞われました。被災地の状況と求められる支援について、発災翌日から現地に入り、支援を続ける国内災害担当の生田目充が報告します。

### 10年で三つの大災害

「どうしてまた熊本なんだ」。被災地へ向かいながら、やりきれない思いがこみ上げてきました。

AARが熊本で緊急支援活動を行うのは、2016年の熊本地震、熊本県内だけで50人以上の死者を出した2020年の九州南部豪雨に続き3回目です。10年で3つの大災害は本当に過酷です。

熊本市を抜けて益城町に入ったころから、家屋が倒壊したり、道がひ

### 朝から食べていない人も

炊き出しは、1班が八代市・八千把コミュニティセンターで、もう1班が宇城市小川町の延福寺で、30日夕飯から開始しました。この日のメニューは、八千把では五目ご飯、延福寺では中華風ソーメン。38度の暑さと断水の中、食中毒を起こさないよう細心の注意を払って調理しました。八千把では朝から何も食べていなかった。あ

#### <被害状況>

死者：38人  
負傷者：364人  
避難所：59カ所  
避難者：2,135人(最大7月30日約1万人)  
建物被害：5万5,717棟(うち全壊1,796棟)  
※建物被害はいずれも推計値

断水：最大約1万8,000戸  
(8月28日までに本管は全面復旧)  
熊本県 災害対策本部 (8月31日時点)

地震被災地での障がい者支援～  
フィリピン地震

# 対話を重ね、届ける支援



配付会場に集まった大勢の人々  
＝サランガニ州グラン町で2026年6月26日

フィリピンでは障がいのある人の貧困率は障がいのない人の1.5倍とされ、生活の立て直しは容易ではありません。薬や大人用のおむつなど、必要なものは一人ひとり違い、画一的な物資配付では応えきれない

者世帯を訪ね歩きました。話を聞いた多くの方の家が全半壊し、支援もわずか。松葉づえを使うヨリーさん(60代)は、「地震の時は家にいて、必死に逃げ出した後、自宅は倒壊。畑も地滑りでだめになり、家畜も死にました。収入源がなくなり、食べ物心配」と話します。

今後もうこうした経験やネットワークを活かし、支援の届きにくい人たちを支えてまいります。



カンボジア  
プノンペン事務所  
大室 和也(理学療法士)

見えない被害を訪ねて  
フィリピン・ミンダナオ島沖で6月8日、マグニチュード7.8の地震が発生し、被災者は162万人を超えました。AARは10日にフィリピンに入り、調査を開始しました。



物資を手渡すAARの荒井大地  
＝南コタバト州ジェネラルサントス市で6月23日

ことがわかりました。AARは6月23日から29日にかけて、ジェネラルサントス市およびグラン町の5カ所で、障がい者世帯を中心に635世帯に米や油、缶詰などの食料を配付、障がいのある341人に、5000ペソ(約1200円、米10キロ程度)の現金も給付しました。7月以降は、支援が届いていなかったバルート島とサランガニ島にも対象地域を広げ、365世帯にソーラーライトや寝袋、蚊帳などの生活物資を、300世帯に現金を届けました。

「車いすが欲しい」に応えなかった理由  
支援内容については、協力団体のメンバーや行政担当者との徹底的に話し合い、決めていきました。その過程で、「車いすが欲しい」という強い要望も上がりましたが、それに応えることはしませんでした。車いすは使用者の身体に合ったものでなければ、かえって健康に悪影響を及ぼしかねず、また生活環境や一人ひとりのニーズを考慮しなければ、すぐに使われなくなってしまう。緊急時にそうした対応はできません。繰り返し話し合い、納得していただいたうえで、優先度の高い食料支援や現金給付から実施しました。こうした要望と支援のズレは、「本当に必要な支援は何か」を一緒に考え続ける大切なプロセスでした。この対話の積み重ねが、今回限りで終わらない信頼関係につながっています。

センター発足 連携して支援  
障がい者の中には、行政や障がい者施設とは関係を持たずに暮らしてきた方もいます。障がい者の権利保護のための国際団体、DPI日本会議議長で、熊本県在住の平野みどりさんは「災害に遭った時『大丈夫ですか?』と聞いてくれる人も、物資を届けてくれる人もいない、困っているも自分から声を上げられない障がい者がたくさんいる」と話します。

被災者が元の生活を取り戻すための支援は、これからが本番です。当事者の方々に寄り添うことを第一に、支援の隙間を埋めるべく活動を続けてまいります。



東京事務局  
生田 目 充

AARは20年の豪雨被害の際に築いたネットワークを活かし、7月29日から水や食料、拭きシートなどを障がい福祉施設に届け始めました。こちらから障がい福祉事業所、福祉避難所などを訪問してニーズを聞き、小型エアコン、携帯トイレ、尿取りパッドなど必要な物資を提供しています。8月末までに11施設を支援しました。

こうしたニーズを掘り起こすため「被災地障害者センター」が8月半ば、八代市に開設されました。AARは、全国の障がい者団体が連携する「日本障害フォーラム(JDF)」などとともに、センターをサポートします。具体的には専門機関の紹介、住まいの再建支援、運営資金の拠出などです。センターの開設後、早速地震で自宅に段差が生じたとの相談があり、AARは8月末にスロープを設置しました。

支援から誰も取り残さない――この理念に基づき、AARは災害時の障がい者支援に力を入れています。被災地の障がい福祉施設には、利用者の居住する建物が大きな被害を受けて会議室で多数が寝泊まりしているところや、作業場が壊れて仕事ができないなどさまざまな被害が出ています。また、「避難所は受け入れ態勢も整っていないうえ、障がい者を避けるような人もいるので、気後れします」といった声も聞かれ、やむなく在宅避難や車中泊を続ける障がい者やご家族もいます。



障がい者施設「熊本こすす園」に衛生用品をお届け  
＝熊本県宇城市で2026年8月1日

## 避難所に、障がいのある人がいる― その前提は、共有されているか

東京事務局 田丸 敬一郎

AARが災害支援で最も大切にしているのは、「当事者の目線に立つ」こと。真に求められる支援を届けるには、被災された方々一人ひとりから丁寧に話を聞くことが欠かせません。AARは現地の当事者団体と密に連携し、柔軟に動くことで、大きな支援の枠組みからこぼれ落ちてしまうニーズに応えています。

私自身、障がい当事者であるため、発災直後の混乱した現場に入ることは容易ではありません。しかし、緊急期から復興期へと移り、長期的な支援が必要となるフェーズでは、当事者だからこそ寄り添えること、私にしかできない役割が必ずあると感じています。

能登半島地震の被災地では、「日頃の地域のつながりで、避難はスムーズにいったものの、避難所では支援があまり得られなかった」という障がいのある方の声を繰り返し聞きました。ある視覚障がいのある方は、「トイレに行きたくても周囲にどんな人がいるかもわからず、誰かに頼むのが難しかったため、スマホで知り合いを呼ん

だ」と打ち明けてくださいました。災害時の避難所では、普段なら快く助けてくれる人も余裕を失い、結果として在宅避難や車中泊を選ぶ方が少なくないのが実情です。

避難所の環境の問題と同様に、この課題は東日本大震災の頃から指摘されてきました。それでも災害のたびに繰り返されるのはなぜなのか。制度や設備が足りないからだけではなく、「避難所に障がいのある人がいる」という前提そのものが、まだ共有されていないからではないでしょうか。障がい当事者として現地で活動をしなが、こうした生の声を伝えていくことも、私の重要な役割であると感じています。



能登半島地震被災地で視覚障がい者から話を聞く田丸  
＝石川県七尾市で2024年6月20日

2026年11月27日(金) 18:00～、災害被災地での障がい者支援をテーマにしたオンラインシンポジウムを開催します。詳細は、後日ホームページでお知らせします。

## 緊急支援

能登半島大雨緊急支援  
障がい者の働く場を守る被災した施設の清掃を行うAARの柳町幸平(左)  
＝羽咋市で2026年8月29日

永森栄一理事長は「送迎車がなければ利用者は仕事へ行くことができない。一方、レンタカーを借り続ければ費用がかさみ、事業経営そのものが危うくなる」と話します。また、石川県羽咋市の一般社団法人「つながり」でも床上浸水により設備が被害を受けました。

介護・障害福祉サービスを提供する事業者は、自然災害の際に業務を早期に再開できるように、「事業継続計画」の策定が義務づけられています。しかし、人手不足の小規模な事業所では、今回のような大きな災害に遭った際に計画どおり対応するのは困難で、施設の清掃や復旧には専門知識や技術も必要となります。そのため、AARは専門性を持つ他団体と協力しつつ、各事業所が計画に沿って事業を再開できるよう、サポートしています。

富山県水見市で障がい者の就労継続支援などを行うNPO法人「bーらいふ」では、建物が床上45センチまで浸水し、送迎車両10台が水没。急ぎよ、5台のレンタカーを借りて対応しています。

このほか、能登半島地震の被害に遭い、今回の大雨で床上浸水や雨漏り被害を受けた個人宅からも複数の支援要請が届いており、状況を調査中です。

## 感染症対策

エボラ出血熱予防（コンゴ民主共和国）  
「史上最悪の流行」を防ぐ

手洗いを励行する少女＝北キヴ州ゴマ市で2026年7月

や治療法がないことや、発見の遅れが感染拡大につながっています。感染確認後に死亡した人の割合は6月初旬の約20%から9月には48%まで上昇しました。

エボラウイルスは、感染した人や野生動物の血液・体液に接触し、ウイルスが付着した手で目や鼻、口などの粘膜に触れることで体内に侵入します。一方で、ウイルス自体は石けんやアルコールに弱いので、手洗いや予防知識が感染防止の鍵となります。

アフリカのコンゴ民主共和国では今年5月以降、東部と北部の6州でエボラ出血熱の流行が続いています。9月7日時点の感染者数は6757人で、半数近い3267人が亡くなるなど、同国史上最悪の感染拡大となっています。AARは、現地協力団体を通じて、北キヴ州ゴマ市で感染拡大を防ぐ支援を行いました。

保健当局によると、流行しているのは、エボラウイルスの中でも稀な「ブンディブギョ株」で、承認されたワクチン

協力団体の担当者は、「手洗いや感染予防の知識が定着して感染リスクが下がりました。AARなど海外からの支援が希望につながっています」と話しています。

## 緊急支援

カンボジア国内避難民支援  
子どもの学習をサポート

AAR が支援する学習クラス＝2026年6月

日雇い仕事をして生計を立てています。避難所では、小学生の教育が課題でした。地元の小学校までは約3キロ離れており、保護者は通学中の交通事故や慣れない環境になじめるかといった不安もあり、子どもを学校に通わせることをためらっていました。

カンボジアでは、2025年12月に激化した隣国タイとの軍事衝突で、多くの住民が避難を余儀なくされました。それから10カ月以上が経った今も、西部ポーンサット州の避難所では多くの人

が避難生活を続けています。AARは同避難所で、子どもたちの学習支援を行っています。

避難所では約60世帯170人が、ビニールハウスを改装した仮設住宅で暮らしています。自宅の破壊や占領、地雷の残存などの理由で帰還のめどは立っておらず、避難民は貯金を取り崩し、

この状況を受け、AARは避難所内で学習クラスの運営を支援しています。教員3人に日当を支給し、就学前から小学6年生までの子ども22人に読み書きや計算を教えています。セム・ヴァンディ先生は「学習機会の提供は、子どもたちが避難生活の恐怖を乗り越え自信を取り戻す契機となる」と話します。一方で、学習クラスでの指導は教員の放課後（午後3時以降）に限られ、正規カリキュラムは行えていません。そこでAARは地元教育関係者と調整し、バイクによる送迎などの通学手段を整備。避難所での学習を続けつつ、子どもたちが少しずつ地元の学校に通えるよう、後押ししています。

## スタッフ日記

## 別れは、再会へと続いている



ウガンダで仲良くなった子どもたちと

7月からは、ミャンマー駐在員として同国最大都市のヤンゴンで暮らしています。実は私は、1歳から3歳までこの街に住んでおり、25年ぶりの「里帰り」です。とはいえ当時の記憶はほとんどないので、新しい赴任先としてのミャンマーで、人々の優しさに感動したり、美味しい料理を楽しんだりしています。

そのヤンゴンで思いがけない再会が待っていました。25年前、日本人学校の幼稚園で私の担任をしてくださった先生にお会いすることができたのです。もちろん私はほとんど覚えていないのですが、先生は私のことだけでなく、家族のことや当時のエピソードまで鮮明に覚えていてくれました。想像をはるかに超える感動の再会でした。

ミャンマーでの再会を経験し、ウガンダでの別れの捉え方が変わりました。ウガンダでの別れは寂しいものでしたが、別れは終わりではなく、再会へと続いています。ウガンダの皆さんとも再会できることを願いながら、これからも一つひとつの出会いを大切にしていきたいと思います。

ヤンゴン事務所 秋山広輔



# 年齢は関係ない 「したいこと」に挑戦し続ける



アーティスト・コーディネーター／AAR副会長

## 加藤 タキさん

日本の「アーティスト・コーディネーター」の先駆けであり、81歳の今もテレビ・ラジオ、講演会などで活躍する加藤タキさん。お母さまは、日本初の女性国會議員で社会運動家の加藤シヅエさん（1897―2001年）であり、AAR創設者・相馬雪香を支えた盟友でした。現在AAR副会長を務めるタキさんに、2人の思い出や、彼女たちから引き継いだ思いを聞きました。

### 12歳で1人でアメリカへ

シヅエさんは相馬初代会長より15歳年長。仲が良く、AAR創立時には人を紹介するなど支援してくださったそうです。

私にとつては「雪香おばさま」。1957年、私が12歳の時、MRA（道徳再武装運動、現国際IC）の大会に出席していた母を訪ねて、米・ミシガン州まで1人で行ったの。そこに雪香おばさまもいらした。MRAの活動が2人を結んだのではないかと。51年のサンフランシスコでの会合の写真にも2人が写っています。MRAは「社会や他人を変えようと思ったから、まず自分が変わらなければならない」と説いた。母も雪香おばさまも常に「誰が正しいかでは

なく、何が正しいかだ」と言っていました。それが、それもMRAの精神。東西対立の時代に大切な視点でした。



母、加藤シヅエさん（当時99歳、右）とタキさん＝1997年1月撮影

12歳の子を一人でアメリカに行かせるのは大胆ですね。

私が生まれたのは父、勤十（衆院議員、労働大臣）が53歳、母が48歳の時。東京大空襲の20日後でし

た。両親は、自分たちがいつまで生きられるかわからない、この子には一日も早く自分の足で踏ん張って、自分の頭で考え、自分の心で感じる人間になってほしい、と思ったのね。

3歳のころ、焼け野原で転んで、血が出て泣いた。でも母は抱き起こしてくれない。仕方なく自分で立つたら、抱きしめてくれた。そして「人はみんなケガをすれば赤い血を流す。どんな目の色の人、髪の色の人、肌の色の人もそれは同じよ。ただ考えていること、言うことは違うかもしれない。でもそれはその人その人なのよ」と教えてくれた。

人として、国際人としての心構えですね。シヅエさんは17歳で結婚し、米国で産児調節運動に出会われた。「雪香おばさま」は英国人の祖母を持ち、「憲政の父」と呼ばれた政治家の父・尾崎行雄と米国を回っています。

2人ともグローバル・マインドを持つていて意気投合したの。女性がまだ虐げられていた時代で、同じ女性同士としてお互い頑張りましょう、

と言ひ合えた。2人とも「働く女性」のバイオニアでもあった。個として自立し、互いに認め合う関係だったと思います。

### オードリーさんから学ぶ

タキさんのAAR理事就任は2004年。シヅエさんが104歳で亡くなった3年後です。

AARを応援していた母の遺志を継ぐという思いに加え、俳優オードリー・ヘプバーンさんが、63歳で亡くなる数年前から国連児童基金（ユニセフ）の親善大使を務めていたことが頭にありました。私が国際間の「アーティスト・コーディネーター」の仕事を始めたころから、個人的なお付き合いがありました。私が理事のお誘いを受けた時、59歳でしたが、オードリーさんが色々とお話くださったことを思い出し、自然に受け入れられました。

### 3つのDを意識する

2005年には副理事長に、15年には副会長に就任。チャリティコンサート開催などに貢献されました。

ザンビアでHIV感染者と子どもたち、ラオスで重度障がいの子どもたちと会い、東日本大震災では被災地にも行った。その先々で、自分はどうなにか想像力が足りなかったかを思い出しました。

よく私は思うの。ちっぽけな私に何が



AARの活動を視察するためザンビアを訪問  
＝2006年撮影

できるの？ 私が現場で支援活動がで

きるわけじゃないし、被災を経験したわけでもない。でも想像すること、心を寄せることはできる。まずは寄付しかない。多くはできない。最近、「3つのD」と言っているんです。「できる人が」「できることを」「できるだけする」。そしてマイナスのD、「だって」「でも」「どうせ」は言わず、「できる」「大丈夫」「どうにかなる」の気持ちで生きる。

「自分は何もできない」じゃなく、できることがあるはず。自分ができること、自分がしたいことを自問自答する。例えば1000円でも、1000円でも、1円でもいい。それが「1人1円キャンペーン」の精神です。

### 1人1円キャンペーン

「1人1円キャンペーン」は、創立時、

### 「自分を好きですか」

タキさんは67歳から社交ダンス、75歳からシャンソンを始めました。

友人がダンスで痩せたので、自分も頑張り、8〜10キロ減らしました。歌は始めたらすぐ音域が広がった。同世代にエールを送つてと言われると、私は「自分を好きですか」って聞くん

です。自分を好きになるには、「ねばならぬ」から自分を解放する。「この年代だから、何かしなければならぬ」じゃなく、「この年代だし、何かしたい」。父が大事にしていたのは「学んで老いず」という言葉。何をするにも遅すぎることはない、思いついた時がチャンスだといつも言っていた。母も「年を取ったから学ぶのをやめるんじゃないんです。学ぶのをやめるのは

死ぬ時です」と。「百歳なのに本当におしゃれですね」と言われ、「百歳だからおしゃれしなきゃいけない決まりはないでしょ。百歳らしくしなくちゃいけない決まりもないでしょ。私は私らしくしているんです」と言い切っていた。

### 2人はまだ青春時代でした

相馬会長も「人生の本舞台は常に将来にあり」とよく言っていました。67歳でAARを始める時、シヅエさんに背中を押していただいたのでは？

当時の67歳は、今なら80歳ぐらいの感覚？ でも、彼女らにはまだ青春の時代でした。やりたいことが多くて、一つひとつ片付けないとひどい世の中になつてしまうという使命感があった。使命感って生きがい。雪香さんは、日本人は冷たいと言われて黙っていた。政府が難民を助けてくれないなら私がやる、という使命感があった。母もきつと「67歳のあなたがそんなこと始めちゃいけないって誰が決めたの」「いくらでもサポートするわ」って言ったと思います。あふれるような怒りと情熱と慈愛を持ち続けた2人でした。

「1人1円キャンペーン」  
についてはこちら



## もれなく、むだなく！リニューアル

北海道の株式会社六花亭製造が手がけるAARのチャリティチョコレートは、2026年度よりリニューアルし、受注生産に移行します。品切れやフードロスを防ぎ、管理コストも削減することで、むだなく支援の現場に還元します。味はストロベリー、パッションフルーツ、ホワイトの3つ。ご注文はお電話かチャリティショップで。詳しくは同封のチラシをご覧ください。



税込み800円  
(3種各4個)



## ふるさと納税で国際協力

AARは、佐賀県が募集するふるさと納税の「NPO等を指定した支援」の対象団体に選ばれています。ふるさと納税を通していただいたご寄付は、佐賀での国際理解教育の活動のほか、AARが世界各地で行う難民支援などの活動に活用させていただきます。ふるさと納税を通してぜひご支援をお願いいたします。



「ふるさとチョイス」  
WEBサイトから



## 熊本地震緊急支援報告会：気持ちを被災者の方々に届けるのが私たちの使命

最大震度7を観測した熊本地震の発生から1カ月が経過した8月28日、熊本地震緊急支援のオンライン報告会を開催しました。

発災直後から被災地で支援活動を行っているAAR東京事務局の生田目充と竹内和彦が登壇し、パートナー団体と連携して実施している炊き出し、避難所や福祉施設への物資配付、断水が続く地域での仮設シャワーの設置など、現場での活動状況を報告しました。また、障がい者や言葉の壁に直面する外国人被災者など「支援から取り残されやすい方々」への支援や、物資が個人の手元まで届きにくい「ラストワンマイル」の課題などについても共有しました。

後半の質疑応答では、参加者から「障がい者や要配慮者の方々はどのように避難生活を送っているか」「現地行政との情報交換の機会はあるか」「避難所でダンボールベッドは活用されているか」「水の確保はどうしているか」といった具体的な活動や現場の課題に関する質問が寄せられました。さらに、「私たちは被災地のために何ができるか」という問いに対し、生田目は「現地行政が募集しているボランティアに応募して活動することもできる。また何かしたいという皆さまの気持ちを預かり、被災者の方々にしっかり届けることがAARの使命だと思っている」と語りました。

## 難民問題を自分ごとに：夏休み高校生向け探究型ワークショップを開催



AAR職員の講義を聞くワークショップの参加者

高校生向け探究型ワークショップ「難民問題を知る 考える 行動する」を8月3日と6日、AAR東京事務局（東京都品川区）で開催し、計46人が参加しました。

「難民条約」や「難民と移民の違い」について学んだほか、AAR東京事務局のアフガニスタン人職員とベトナム難民として来日した森スワンAAR理事が、それぞれ難民当事者としての体験を語りました。命の危険から日本へ避難した経緯や、言葉も分からない異国で孤独を感じながら暮らした経験など、リアルな体験談に参加者は真剣に耳を傾けました。また、ケニアの難民居住地の現状について学び、難民の家族として将来を考えるロールプレーに取り組みました。さらに、自分たちにできる難民支援について考え「寄付付きの自動販売機を学校に導入してもらう」「難民の方とアート作品を作って発表する」などの企画を考えました。参加者からは「今日からの生き方が変わるような出来事だった」「難民問題を初めて自分事として考えられた」などの感想が寄せられました。



AAR 国内災害事業担当の生田目充(上)と竹内和彦(下)

## 自然災害被災者支援へのご寄付ありがとうございます

6月に発生したフィリピン地震や7月の熊本地震などへの支援活動に、多くの個人と企業・団体の皆さまからご寄付をお寄せいただいたほか、支援物資の提供などのご協力も賜っております。ご支援に心より御礼申し上げます。個人情報に配慮し、100万円以上のご寄付、または100万円相当以上の物品寄付をお寄せいただいた企業・団体のみご紹介させていただきます。

### 熊本地震

ゴールドマン・サックス・ギブズ  
全国友の会  
中外製薬株式会社  
東京エレクトロン株式会社  
一般社団法人日本香港人協会  
公益財団法人野村生涯教育センター  
ビーズ株式会社(DOD)  
一般財団法人フェリシモ財団

The Mustard Seed Mission (台湾)  
株式会社三吉  
株式会社MIYOSHI

### フィリピン地震

日本郵船株式会社

### 活動全般へのご寄付

デカトンディストリビューションジャパン株式会社

(2026年5月16日～2026年8月31日、五十音順)



活動現場を視察したThe Mustard Seed Missionのメンバー(左から2人目:吳秉翰さん、4人目:倪欣さん)とAAR職員＝熊本県水川町で8月11日



日本香港人協会へ感謝状を贈呈(左から、日本香港人協会の李詠茵理事、陳詠妍代表理事、AAR 理事長の堀江良彰、事務局長の古川千晶)＝8月28日



東京エレクトロン株式会社へ感謝状を贈呈(右は東京エレクトロン株式会社の堂和寛常務執行役員)＝9月8日

## まるごとプロジェクト募金 2026 御礼と秋募集へのご協力のお願い

AARが世界各地で実施する活動の資金を一括でご支援いただく「まるごとプロジェクト募金」。2026年春に募集した7つのプロジェクトにご寄付を賜りました。ご協力に心より御礼申し上げます。新たに5つのプロジェクトを追加し、引き続きご寄付を募っています。詳しい支援内容は、同封のチラシをご覧ください。お電話などでもご説明いたしますので、どうぞご遠慮なくお問い合わせください。

WEBサイトでも  
ご覧いただけます



## 「1人1円キャンペーン」を開始します

「日本人が1人1円出せば1億1000万円になる」。AAR創設者・相馬雪香の思いを受け継ぎ、創立50年に向けて「1人1円キャンペーン」を開始します。ご家庭で眠る小銭を「手数料免除口座」（同封払込用紙）を通じてお寄せください。

※通信欄に1人1円キャンペーンとご記入ください。

### お問い合わせ

AAR 東京事務局 鎌田、吉澤  
TEL：03-5423-4511  
E-mail：info@aarjapan.gr.jp



## 2026 年夏募金 ご協力ありがとうございました

6月に開始した夏募金キャンペーンに、のべ1,395人の皆さまより15,891,464円のご寄付をいただいております(9月10日時点)。温かいご協力に心より御礼申し上げます。中東危機など世界の人道危機に対応するため、支援を続けてまいります。

## 不用品で寄付 ケニアの子どもたちへ文房具を届けます

ケニア北部のカロベイエ難民居住地とカクマ難民キャンプ周辺の学校では、貧困のために学用品を買えず、勉強についていけなくなる子どもたちがいます。こうした子どもたちの継続した就学を支えるために、AARは「学校への懸け橋募金」を実施しています。

ご自宅に眠っている不用品を寄付することでケニアの子どもたちに学用品を届けることができます。詳しくは同封のチラシをご覧ください。

